

## 性格

小嶋祥三

わたしは最強度のあがり性で、特に子供のころは人前で何か話さないといけないときに、極度に緊張してしまい、頭の中が真っ白で何も話せないことがあった。成長するに従い、いろいろと経験することにより、表面的にはだいぶ和らいだように見えるが、緊張しやすいところは変わらないと思う。若いころから緊張すると手が震えたが、現在もそれが続いている。注意欠陥多動 ADHD 的なのかなと思う。多動ではないが注意に問題があるようだ。今思い出しても、小学校から中学校へ上がった最初の半年ほどは特にヒドかった。

小学校では、クラスが同じでなくても、地域が限られていることもあり、どのクラスにどんな子供がいるか知っていた。中学校には主に近隣の3つの小学校から生徒がやってきた。当然知らない子供が多い。また、小学校では図工、音楽、家庭科以外は担任が教科を教えた。ところが、中学校では教科ごとに違った先生が授業を担当した。こうした大きな変化にわたしは自分自身を制御できず、なすすべがなかったようだ。これらの新しい刺激にただただ圧倒されていた。

その結果は当然成績にも表れたが、特に図工がひどかった。小学生のわたしは絵を描くのは嫌いではなかったし、表彰されたこともあったように記憶している。ところが、中学校ではなぜか描けなくなった。描いた絵が気に入らず、また、時間内に仕上がらず、未提出になった。家で絵を完成させればよかったのだろうが、翌日からの新しい刺激に翻弄され、そのままになった。そして翌週の図工の時間にも同じことが起こった。果たして、絵を完成する気があったのか、絵を提出しないといけないと思っていたのか、今となっては分からない。一学期の図工の成績は「1」だった。面談で母親が理由を聞いたところ、作品を提出してくれないとどうしようもないと先生は答えたそうだ。二学期、三学期になると次第に落ち着いていったが、毎学年クラス替えがあったので、一年生の時ほどはひどくなかったが、また元に戻った。高校入試などは心そこにあらずで、ソワソワ、オタオタと対応していたのではなかろうか。その結果は、言わずもがな、である。

わたしはまた最強度のくすぐったがり屋だった。子供のころ床屋さんが苦手だった。うなじの毛を刈られるのがくすぐったくて我慢するのが大変だった。高校生のころと思うが、隣に座っていた級友がわたしの注意をひこうとして、腿をたたいた。わたしは反射的に飛び上がってしまった。小、中学校の林間学校や修学旅行の夜はなかなか眠ることができなかったし、夜行列車も眠ることができなかった。このように思い出してみると、現在のわたしの心や行動の傾向がすでにあらわれているように思う。外部刺激（環境の変化）に敏感で緊張しがちなので、それらを避け、内向きになった。デ・キリコの絵が好きなのは現実の世界から逃れようとした結果かもしれない。わたしが身の上で起こっていることに現実感を持ってないのも同様の理由からかもしれない。環境が変化する旅行は苦手だったし、エライ先生のような緊張する存在には近づけなかった。逆に、変化のない生活はあまり苦痛でない。毎日同

じことをしなければならぬ動物実験に向いていたのかもしれない。

ただ、研究面ではわたしは結構テーマを変えたし、新しい領域と接触するのには心躍った。なぜこちらでは環境の変化を好むのか、自分でもよく分からない。わたしにとって、研究は内的なものなのだろうか。そういえば、外部に何か目標があり、それに向かって研究するということはなかった。自分にとって研究が面白ければいいのだ。それがすべてだったような気がする。